

「みちくさ」のあつた頃

山 崎 健

「最近の子どもは…」という事が話題になったのは何時からだっただでしょうか。

「最近の若い者は…」と同じではるか昔から言われ続けていた事と思われます。「最近の〇〇」が「だめ」なことにしないと大人（権力者）が威張れないのです。記憶に新しいところでは「最近の教育はなつてない…」と世界に誇るべき日本国憲法と一体であるはずの教育基本法を「改正」という暴挙もありました。

さて、「子どもの身体のおかしさ」もたびたび指摘されています。

「体力低下」の問題は、1960年代の「マンパワー政策」の一環としての「体力づくり政策」が1970年代後半から行き詰まり、授業が「体力づくり」から

「楽しい体育」に矮小化していった（どちらもあまり好ましくないのですが）ためその値（昭和63年頃）をピークに年々低下してきたという経緯があります。

1978年日本体育大学の正木健雄先生らの「子ども身体は蝕まれている」というNHK番組の放映が大きな国民的関心を引きました。

前述のとおり「最近の子どもは…」という指摘は何時の世もあつたのですが、養護教諭の先生方から「転んでもかばい手が出ない」「朝礼でボタン」「背中がグニャ」などの問題点（最近の子どもで気になることが指摘されたのが始まりです。そして、1990年以降は「すぐ疲れたという」「アレルギーやアトピー」「視力の低下」などその様相が変化してきていること

も指摘されています。

1980年代後半から実施している我々の小学生の生活時間と健康に関する調査でも「生活時間帯の夜型化」「習い事が週平均4・2回」「体脂肪の増加と持久的能力の低下」「運動好きの子どもの骨折の増加」などの問題点が浮かび上がってきました。

最近の小中学校の統廃合に伴う通学範囲の広域化と学校までの交通手段の変化（スクールバスや自家用車での送り迎え）も話題となっています。

東海大学の小澤治夫先生の調査でも、北海道の小学生のほうが東京都の小学生より一日の歩数が少ないというデータが報告されています。

世界保健機構（WHO）は、子どもの「生き生きとした生活（Active Living）」の重要性を指摘していますが、その内容を見ると伝統的な踊りや遊びとなっています。つまり、日本でいう「木登り」「魚釣り」「缶けり」「鬼ごっこ」「独楽回し」「あやとり」「お手玉」などの「伝承遊び」です。これらは「かつて」は子どもの世界（子ども社会や子ども文化）に脈々と存在していたものです。

ところが現在は「子どもの多忙化」が進んでいます。

習い事が週4回（我々の調査での最高は11回）を越え、同時に遊べる子どものサイズが5人以下になってくると伝承遊びは衰退し、TVゲームやブランド玩具（〇ちゃん人形など）などに遊びの対象が移ります。同時に遊ぶ空間も屋外から屋内へ移りダイナミックな身体遊びは減少して行きます。

“昭和”へのノスタルジーは「額に汗して働けば……」「3丁目の夕日……」などなど様々ありますが、学校帰りの「みちくさ」などはその最たるものかも知れません。かつて友達と一緒に帰り道の土手や川原、神社の森や原っぱなどは伝承遊びの格好の空間でした。

「仲間」「空間」「時間」の「三間」は子どもの豊かな発達に欠かせないものだと思います。数年前のNHK TV「脳科学で防ぐキレる子」では保育園での仲間や先生との「じゃれつき遊び」の重要性が指摘され、脳の健全な発達のための「環境アセスメント」の必要性が問われていました。

しかし現在は、不審者の出現など学校帰りの危険性もあり「みちくさ」はタブーとなり、広域通学でのスクールバスなどの利用は子どもたちの遊び場を「素通り」し、学校から帰ると今度は塾や習い事（こちらも

バスや自家用車での送り迎えつき）が待っています。

子どものころと身体の健全な発達を願う私たちにとつてもなかなか厳しい環境になってきています。せめて安心して「みちくさ」のできる地域の児童館や公民館、大学生ボランティアや指導員などの充実はできないものなのでしょうか。子どもの生活時間帯の調査からも見えてくる「子ども社会」や「子ども文化」の消失は決して好ましいものとは思えません。非日常的にはなりますが、長期休暇を利用した子どもの野外活動体験（キャンプやどろんこ遊びや「秘密基地」づくり）、農作業や漁業の体験、伝統工芸づくりなどの参加型企画を充実させていかなくは…と強く思っているところです。

（やまさき けん・新潟大学教育学部）



ぬれた教科書は…（古文書修復の応用から）

新学期は、子どもたちの活動が広がります。昨今、安全教育の名で発達の機会が奪われているようすが…。

この時期になると、3年生の女兒の下校時、たんぼ脇で水中生物を観察中、鍵が留めてなかったランドセルの全てを水路に落としかつことを思い出します。何冊かの教科書の注文を、親と一緒に奮闘した「道草」でした。

江戸文化研究・随筆家の故・杉浦日向子さんは、風呂にバスタオルを持ち込み浴室の読書を好んだそうです。私もその日読めなかつた新聞等を読むことがあります。

ある日の入浴時、前日の「文庫本」が浴槽で遊泳中…。慌ててテッシュや、タオル、アイロンでも回復不能…。研究所通信102号「災害に伴う資料保存の取り組み」（滝沢繁氏）の「水に浸かっても歴史資料は修復できます」をヒントに、即席ラーメンの作り方の応用を試みました。

本をビニル袋に入れ、「冷凍庫→天日乾燥」を数回。少し柔らかですが、読書は可能な状態に回復しました。

最近の教科書のコーティングの表紙やカラー写真は、未体験ですが…。困った時に、試す価値はありそうです。

（河台）